

出エジプト記 22 章 20-26 節

テサロニケの信徒への手紙一 2 章 1-8 節

マタイによる福音書 22 章 34-46 節

本日は、礼拝後、バザーです。教会にとっては4年ぶりのバザー、わたしにとっては赴任して初めてのバザーです。教会の皆さまが力を合わせたバザーとして、わたしたちの教会の良き交わりと、訪れる方々にわたしたちの教会の良さが伝わるひとときになればと思います。

本日の旧約日課の箇所について、以前の『聖書（新共同訳）』の小見出しでは、「人道的律法」とありました。新しい『聖書（聖書協会共同訳）』にはこの箇所に小見出しはありません。小見出しを外した理由は、出エジプト記 20 章 22 節以降の「契約の書」の部分に、それぞれ小見出しが付いていたのですが、必ずしも小見出しと各内容の詳細が、一致しなかったからでしょう。

本日の箇所の内容も最初にあるのは「寄留者」（22：20）についてですが、そのあと「寡婦と孤児」（22：21-23）について、そして、「貧しい人への金を貸す時のこと」（22：24）、「質にとる服について」（22：25-26）となっています。確かに、新共同訳にあった「人道的律法」という題は、少し内容と異なっていたかもしれません。

この箇所全体が示している事柄は、自分たちよりも社会的、経済的、そして様々な意味で弱い立場にある人に対する配慮です。最初に「**寄留者を虐待してはならない。抑圧してはならない。あなたがたもエジプトの地で寄留者だったからである**」（22：20）とあります。そこには、この律法が命じる内容とその理由が書かれています。命令の内容は、自分たちの中にいる寄留者、すなわち外国人を虐げてはならないという教えです。律法は、イスラエルのための法律ですが、自分たちの地域に住む、自分たちとは異なる人々に対する配慮を語っているのです。理由は、イスラエルの民も、かつてエジプトでは寄留者であったからです。

これらの教えとその理由は、イスラエルの選びと関係しています。主なる神様は、イスラエルが特別に優秀であるから選んだのではありません。人間の考えを超えた、主なる神様の理由で選ばれたのです。つまり、イスラエルそれ自体が起源的・本質的に特別なのではなく、主なる神様が選んだから特別なのです。そのような、出エジプトの出発当時はまだわからなかった理由が、ここで示されているといえます。すなわち、寄留者の状態から主なる神様がイスラエルを導き出したのは、イスラエルがその経験を忘れず、自分たちが安定した状態になったとき、自分たちの中にいる寄留者にやさしい民となるためだったということです。そして、そのイスラエルの行動を通して、主なる神の愛と正義を示すためだということです。なぜならば、「**彼（寄留者）が私に向かって叫ぶとき、私はそれを聞き入れる。私（主なる神様）は憐れ**

み深いから」、つまり主なる神様は、イスラエルを超えて、寄留者に代表されるように、すべての存在に対して、憐れみ深い、すなわち愛に満ちているからです。

教会の歴史では、ユダヤ教の律法について、否定的に考える場合が時折あります。しかし、このような規定があることから考えますと、律法は素晴らしい内容を持っていると思います。本日の箇所の内容は、現代の視点で考えても、大切なことを語っているといえます。律法は、そもそも主なる神様がイスラエルに与えられた法律ですから、それが素晴らしいのは当たり前かもしれませぬ。しかし、法律を解釈し実行するのは人間です。そして法律である以上、法律自体が完全であっても、その法律から派生する現象は、不完全なものです。それは実行する人間が不完全であるからです。ことに今は、様々な戦いと多くの人々の苦しみのニュースを知る時、まさに痛感します。

そのような中で、わたしたちは本日、久しぶりのバザーを開催します。人の集まりとしても、またそこでやり取りされる経済的な内容も、決して大きなものではないでしょう。しかし、そこに単なる人間的な楽しさや主なる神さまの愛が感じられるならば、わたしたちのその行事は大きな意味があります。本日の福音書は、その愛についての教えです。結論から言えば、「神を愛すること」、「隣人を愛すること」、それらが二つではなく、またどちらかを優先にするのでもない、一つのことであることを教えている箇所です。しかし、本日の日課である、マタイ福音書の物語は、マルコ福音書の物語ほどそのことを劇的に示していませんが、その愛が一つであることは示しています。

これらのことは、教会に集められるわたしたちが、イスラエルの人々よりも、イエス様の出来事を通して学ぶがゆえに、たくさんの資料に基づいて、愛について学ぶことが出来ることを意味しています。しかし、だからと言って、わたしたちが愛を実践することに有利であるわけではありません。またそうであったとしても、わたしたちは愛をすぐに完成できるわけではありません。ことにわたしたちの住むこの世界では、今も戦いが続いています。また、あらたな戦いも始まり、それが今後どうなるかも予想が付きませぬ。

しかし、わたしたちは、そうであるからこそ、主なる神様の愛が世界に満ちることを目指して、歩み続けたいと思います。この世界に主なる神様の愛が満ちるとは、世界中の隅々まで誰も悲しむことのない日の到来です。そのために、今も起こっている争いが、まず一日も早く集結することを願いたいと思います。そして、この地上から、あらゆる争いがなくなることを願いたいと思います。それだけでもなく、病や、貧しさがなくなることを願いたいと思います。その願いは、途方もない目標であり、とても人間の知恵や努力では実現しない顔も知れませぬ。しかし、生と死の別れの悲しみを超える、復活の信仰を心に刻み、そのような日が実現することを願いつつ、歩み続けたいと思います。主イエス・キリストの名によって集められる教会の歩みとは、そのような完成を目指す歩みです。わたしたちもその歩みを続ける教会の一つです。今日は、少しでも教会から世界に、主なる神様の愛が伝わるようにと願いつつ、久しぶりのバザーを心から楽しみたいと思います。